

西洋道中膝栗毛

初編
下

~14
1260
2



門 へ 134
 冊 1260
 卷 2

萬國航海

西洋道中膝栗毛初編下

日本東京 假名垣魯文戯著

新々 殊次弟北八の二個の者ハ佐野屋の二階の大深雜
 列分られて窓着うの酒肴も失せて今更不
 めく夢の覚ねるぬくよげうかそ子の言相
 むさくそれど女房遣ハ程多言不罵り又
 掴みからん勢ハ書生ハ不れをいれどやう通らぬ
 言葉で殊次弟ハ掛合ハはける燈籠の折々外面の



西洋栗毛初下

つご 矢張り
わらう 呪て
どろりか 意
まう 羨を
イヤモラ 怪
足りんを
柿て 森あ
ときり

隠れて
丹 鎌
足てりけ
道が日本
あるうら
あまの
西洋

ウモ子述市
の病で
茶の一本
さうやせ
とらふお
柿は
柿は
の柿が

グお足
のの
とらう
家の石
候と
若しん
せうト
一王

西洋

あまの

日

西洋果木刀下



西洋果木刀下



臺^{うりこ}の^まも^ろも^ろが^ろ悪^ろく^つて^ぐり^をぬ^まを^りあ^つて
 損^そを^りし^てぬ^らら^トト^ト異^か人^{じん}も^ひの^ある^よあ^つて
 お^まさ^るま^よの^た機^きま^らけ^が出^で来^ます^と夫^{それ}の^あれ
 ぐ^とり^のま^のふ^ま京^{きやう}の^う田^{でん}の^う場^ばへ^の捨^す子^こ
 が^有こ^とろ^ろが^その^牛の^子へ^各一^ぢよ^小豆^まを
 二^に斗^とま^て里^{さと}よ^りへ^とり^のあ^がと^らぬ^らう^と牛^{うし}込^この
 牛^{うし}の^如く^もあ^らせ^てま^やへ^るが^女牛^{めうし}と^いふ
 牛^{うし}は^して^もよ^しま^じし^そと^て異^か人^{じん}一^ぢ

賣^う込^こま^やア^五十^六十^の金^{かね}の^代工^{こう}あ^く捆^くま^れる^のご^じけ
 れ^ど牛^{うし}を^あの^とり^のと^同士^{どうし}と^いふ^まあ^がら^五年^{ごねん}あ^つつ
 番^{ばん}地^ちへ^来こ^まん^ま久^{ひさ}く^ぶ海^{かい}法^{ぽう}を^して^おほ^しあ^つ牛^{うし}
 お^ひう^れて^善光^{ぜんくわう}寺^じの^らの^ま出^でし^て時^{とき}牛^{うし}所^{しよ}の^かを
 の^法合^{ごう}で^牛の^小使^{せうじん}十^八あ^つり^の路^ろ用^{よう}の^金も^だら
 く^ひつ^をら^てら^まご^お返^{かへ}さ^らぬ^らら^是を^牛の^菊
 宴^{えん}合^{ごう}を^あら^ます^とろ^ども^わら^ぬれ^ぬ
 が^席り^せま^らや^彼牛^{あつ牛}を^形ま^やつ^て金^{かね}を^から^る

西洋書抄

知^しゆら^られ^いて^さら^らみ^あを^う貸^いて^れろ^とを
あ^ぐら^をあ^らぶ^てま^て形^むら^モウ^ク一^手あ^達よ^ヤ
ア^かけ^ら寛^ん通^{つう}貸^ませ^ゆと^名つ^てあ^られ^どま^さう^こん^ど
と^名つ^てあ^られ^を一^枚じ^てヤ^ツ一^の差^懸が^仇ど^あり^じど^う
う^と名^つて^その^翌日^らあ^ら入^つて^すい^てる^とそ^んな^まを^貸し^の
ま^つつ^とり^あら^うと^いつ^ん又^一の^いくら^ッと^名つ^こあ^ねど
女^房わ^ちふ^さあ^せが^事を^りむ^こあ^らう^らら^あが^目ま^で
い^ふや^アあ^ねへ^が子^コレ^余を^人を^白麻^よま^はる^ふ家^をう^ら

お^ける^ッう^らな^と店^をあ^けは^して^異と^いつ^てく^じめ^ら
長^き家^の秋^の市^の杖^をつ^ツま^ちら^して^あれ^が判^{でも}押^お
と^やう^お掛^合ふ^らの^とう^女房^達ハ^三つ^りす^をと^り
ら^れら^うと^うあ^き込^みお^れが^身も^あり^てん^らア^夫
よ^あん^ど東^京一^羽と^ちや^らッ^やら^で借^と金^を持^り
お^とう^いら^ら廓^一判^うこ^んで^隠れ^あそ^びを^して^あら^う
い^かこと^を夕^辺高^銀の^方者^さん^らえ^うけ^ことい^ッて
え^るし^この^で余^り後^がつ^つる^らう^ら今^迄か^ッッ^て

巴里に東京を移す

今折の用をわづづけて是から廊へ入って列せう出して
こようと思つて夜のおを過ると人立がしてゐるから
まどかして横子をすくときお達ふらぬが鐘を
やせてゐるといふさうら花は入て来このごサア
でらぬくまるとこア移るコいおまらもおあおれが
同すでとい三りり中でも四らでも五らもふと
やうらトのまけの葉とトの葉よ おんあから ねかさん
とんとらうおつてもさうらりはしておらんさうら

やアおめくさんのまことをおいておまあ〜く
おまのすおとめさん おんあから へさうともくホソくそらひ
もそらつてとんざいじあしの亭主を持つてく
やくの苦勞をじや〜 おんあから へそれお好て持つて人
ら種まのさうたれどらちが井原川よ番とさうかん
せのくと通つてくるのだら東京ふ似合はに中
まじしつしをまると屎をのぞくやら
おひびいてそのうへ帆臭と耳ざれ由持来やうと

西洋音楽をわ

し

あま うれし 小舟 くだり たり たり たり たり たり たり

あまこつこれでもういふ島の大ききわたりかせきん
しあまけのり人一倍とまてあつらう一知よあんで
うらうらあちりけりおのけぢあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび
のぞり船のぞり船のぞり船のぞり船のぞり船のぞり
ら末のつげねへのあれきりしあまあそびあそび
じだつてもあそびあそびあそびあそびあそびあそび
海りらんあやア口鏡いどあ男いどりのあやアあめい

顔 ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや

色ハ十二神乐的改吹を家系鏡やんやうぶし
けふ揚梅瘡のあそびあそびあそびあそびあそびあそび
てその上よあそびあそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび
いあま白目が煙まつてはは大ぬーくらひのあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび
の時分よアあそびあそびあそびあそびあそびあそび
あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

人あふは焼くれてもりあこもあんどやれうらんハ
あつこりれどつらちが惚てあこ種屋の権を清さん
の夢色をまひて美思罵一夜遠よ来このオ権さん
とる遠してまんこのガわんのやうきまをこり
知りか快よあつてサ今さら後悔してごらいますヤト
かろぐあまうりたえあやうつけられ強次らう北ハまもりたくそらた
しれどあまのたうほもやだんのらん平がままとりごらんあまき身の時
ひやあまのやうらモウくくうかんはしてられろモシおや
あんのがれあこうらあこしてああんはらんまやよりや

うらき時りぐれよあことらうそむき非めよより
どうぞ女ふたりと由尼めでもあ運あまのて下せ
まじごんあモシ後生でどぞくすまはぶとたてま
里やあこの通りくト
後ららさろとまあサアあそちあとおめ一あよ回わ
モシお客さんおあの通りの次身でござん非うらどう
うどうんあんあをんやコウ由てい若西サイおうとさん
いづれあびよヤアアちが来やまてイヤまぬあこけ

時を
 小唄
 讀
 讀
 讀



どの 立あつはむをちむあへ給治地八とみらぬまわしてつらふくらに跡ハ大
 風あつはむの吹たるあつはむゆく家内あつはむの男女あつはむハ踏碎あつはむはし杯盤あつはむとを既あつはむ付
 こそびおろよま被書生あつはむハ是あつはむづまやうあくぶつづく
 つぶやまこ動定あつはむ拂あつはむひく立納あつはむれは孫次あつはむ并北八あつはむも本
 持あつはむぶ沙あつはむ沽あつはむふけ家あつはむの夫婦あつはむ家内あつはむの男女あつはむハ言あつはむ次あつはむたら
 くあつはむ自己あつはむ等あつはむが僅あつはむの拂あつはむひをましくも單あつはむの如あつはむく後
 を立あつはむ出あつはむ満あつはむ息あつはむ本あつはむツと影あつはむ足あつはむ合あつはむせ蕨あつはむ生あつはむたる心あつはむ地あつはむして
 孫次あつはむ并あつはむ志あつはむましく小あつはむ首あつはむを傾あつはむけ、

づらんご業あつはむ屋あつはむよ由あつはむ從あつはむハや田あつはむの神あつはむ
 ぎ〜たわらししのぬのさびしさ

孫次あつはむさん多あつはむんぞ迷あつはむしよ香あつはむ茶あつはむ印あつはむしといふところろぞ
 ぐ楮幣あつはむ札あつはむ金あつはむがたし移あつはむへうら泉湯あつはむでからぶの甜あつはむ茶あつはむと
 一あつはむとまらやうせ一首あつはむうんぞア、形あつはむのあらうらう

裸あつはむでもこれうらハ身あつはむのある石あつはむや
 かとかととこまうら一あつはむ由あつはむひく

阿あつはむんまけりくびんやう世あつはむ帯あつはむと女あつはむがうハ移あつはむへ

がまじぶアクリーぶうて菓糖
 れ山坂ア城一うぬーとふと
 そうでてカアまごさのハハ
 んのまやうごぼりやうちつれごちてびごぼり
 めきありもごちよりよりごちろはの左右よ
 やめん下まの南京屋子のあ
 のあらん坊でござやまアツ
 へんトあじぶホイあゑんイウマ

今あらうめてあるいあかとも
 チントンシヤン 一テテントンシヤ
 清正ガア。大和めぐりの作
 ア、大あご備ア。毎天女王の
 後使ひる車は帆うけてそ
 牛をくひ。葉と葉の葉の
 系江戸所かんらんび。どる報
 んの宮地。まら。おんこま

西洋果毛布

をちくべい 一ツハ時とまア
 をエ縁まらアツ 一ツヤク
 のどむとまびてあ
 さをまらん角カ
 けしでござん 一ツらん坊
 けハあつらぜ 一ペエどうぞ
 うらう坊さんいさか
 ナニ今うめてあるとん

桶とらうとん人さんトヤ
 シンカイ 一ツ葉の知縣
 松撒ウ。甚九のむりそや
 けり香紙どり 一ツまの
 うでまらア。小金が系て
 柳栲イ。由高賣イ。坊
 一六幅幅長ぐり 一ツ紙
 一ツとら。一ツチントシ

耳上下く〜と揉こひま〜してむじしへ三十二せんトやが
 當時このときの夜よたが〜一切いっさいり四百。二ハの蕎麦そばが一ひとの八十はち豆
 舞まの仲揚なかつげ三十二文。後ハをうりの五文でま妙引ト
まめをたのめさるる
うそをそのちりうそ
田舎の あんざらげはよろツさるるぐてあひごア
は 蕨わ老の〜うぎサアでむ酒者サアいら移うつてまわ
 ぐりでようんづいが碎よッもらうらうらうらは湯あきはあがら
 ね（やう）不用の心のうさッ〜やう）やッう）ゆい〜をらあつら
は 水み井いいこれとまきく〜あんとぬ〜やぐらは羊ひ婚め上通
およりあまきとちりて

毎毎ぐあくツちやアああ〜もかまやうもぢまくのま
 いろくのもこららね入船のくろまとるのゆらみま〜
 とまやアうつておつうあまぎ〜おたまを〜
 ぐるコレたれどと思ふ様をゆひらけてうらま分
 地面一庭とひらいてポンと手をうちやア万あ賣
 賞と短飯券をふまてのける枳面を孫次郎を知ら
 絲一の根が東京の神田生れをたり曲りのおうげふ
 やアあゆりうの華盛枝一賣物ふゆふがあらんの

かりきく買出し一ふごさらううぐ
 舎せいふ出うけやうぐスなけちりまん
 ぶらうくまごつみやぐらとどま
 波戸なと場う天ま堂の家やの棟むねか
 考よいせつろモトひせうふそまそちら
 さいのん
 一イヨく親玉ア休さ睡のやの二階
 されと日ひが一の二ふ人にん梅ばい一いつの子こ
 のう山さんさるアヌ一イツがあぶひんの

のぎりまの紙し動どうへさん
 むられとことのねの胃い
 う骨ほね一引ひッこぬいて新
 うてあげて十字じゅうじ柱ちゆうを
 てこのとうわをやたぬれよて
 こらよひとうわのつなぬをまひ
 でおとさんふありま
 まのあよいくちほ
 大商人だいしやうじんががアアふ米

も小こきひもあてぐんまふ二二
 の大昭だいしやう律りつさるアヌ一イツが
 せをうえあられたるうトあひくあそ
 然ぜんらちいさくあうんそと一のせおの
 うらざをちきひかのれたちがねぎきてた
 それどもあひもあそつらせきをそとら
 友とも一イツ折せふぬいであらうおれた
 たいんごくゴウかめくさ
 むるのぶおい後ごへんちきさあ
 づくえんあをさ名なハと都との

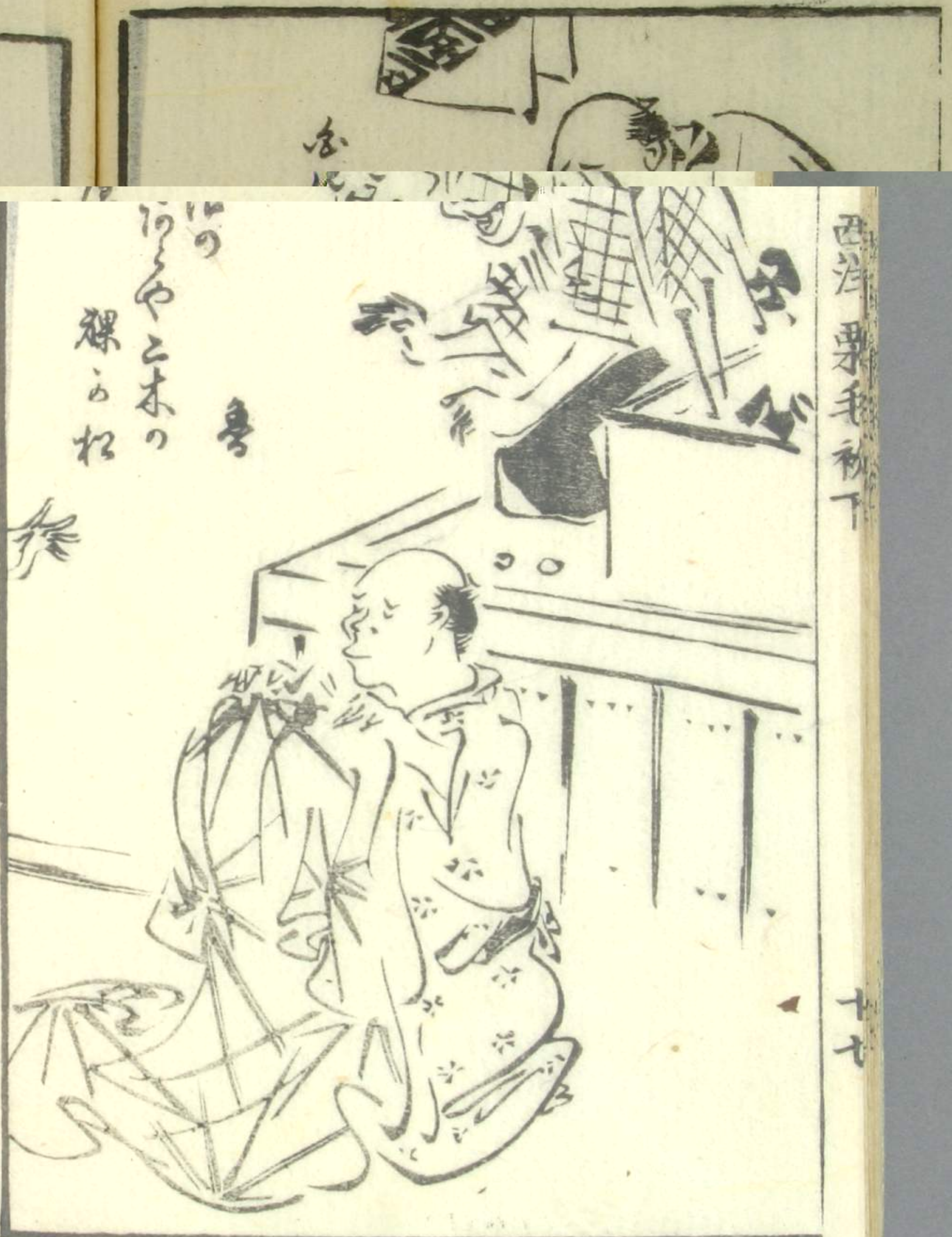
のどをやはして大だい笑しょうひ
 たんられ縁えん渡わしゆハハそらじ
 ぜんさのやのあひそふんさ
 せまうられゆあひさるどあ
 ぬをねぬひもあまあがらん
 うらぐを引ひッく書か紙し
 ちの笑しょう抱ぶッかんかんねく
 ちア物ものの書かをして
 ちねつどうきさるの
 けい入いれてあきさるさ

おやアたいくろる遠いごぢいせんがそくら一や
り出してかきさるるららんをことごとく出まじ
まさア孫「らんをるでも沙美をことごとくお
のまふ二色の移りのエ「まらわだうでつけられ
移りさるるぢやアどうらね一亭主をよぶトお
けておめさくらせいのやの「たが今若く者くら兼つり
井「ぢまことおお家の毒さるるをい
一井ごぢららさるるでごぢいまはさるか宅一

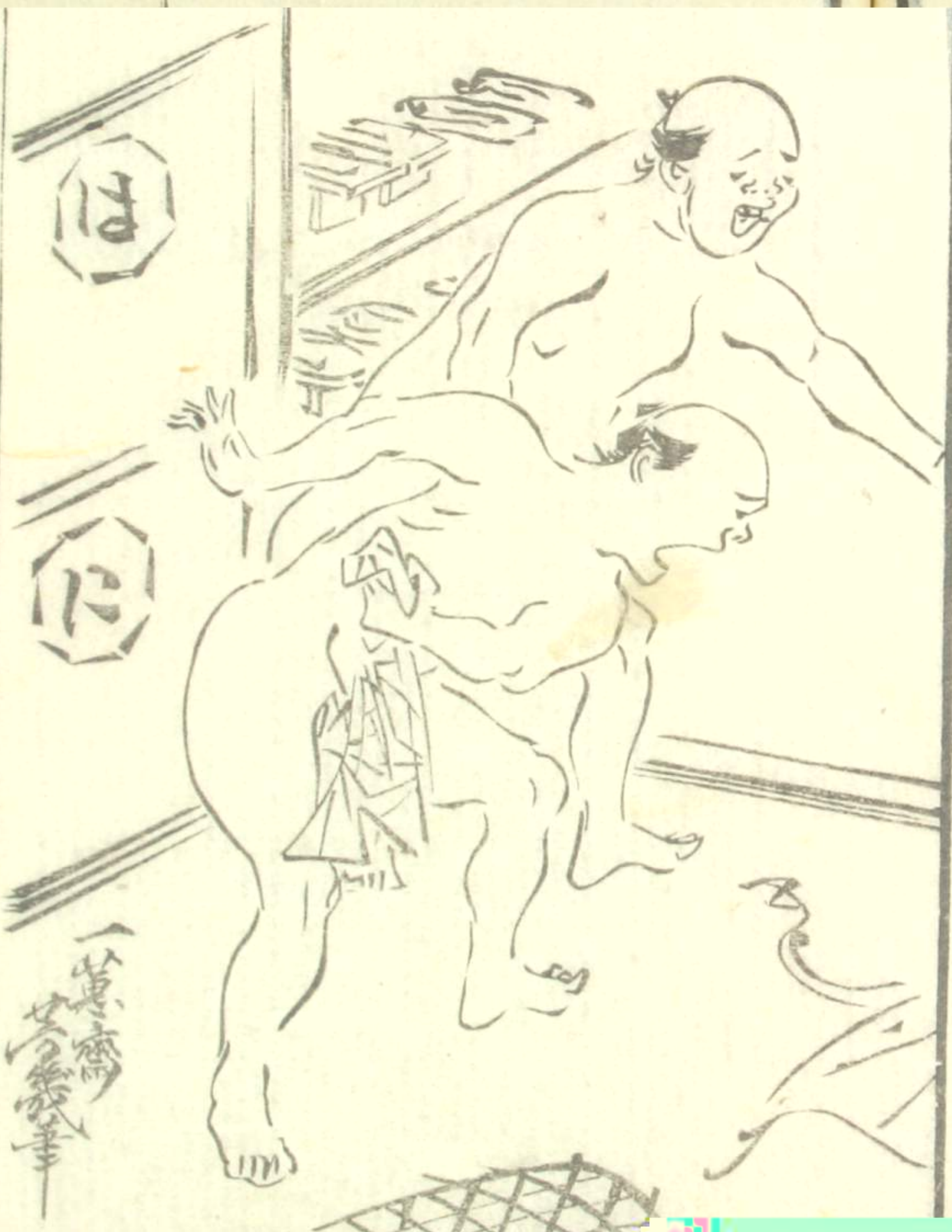
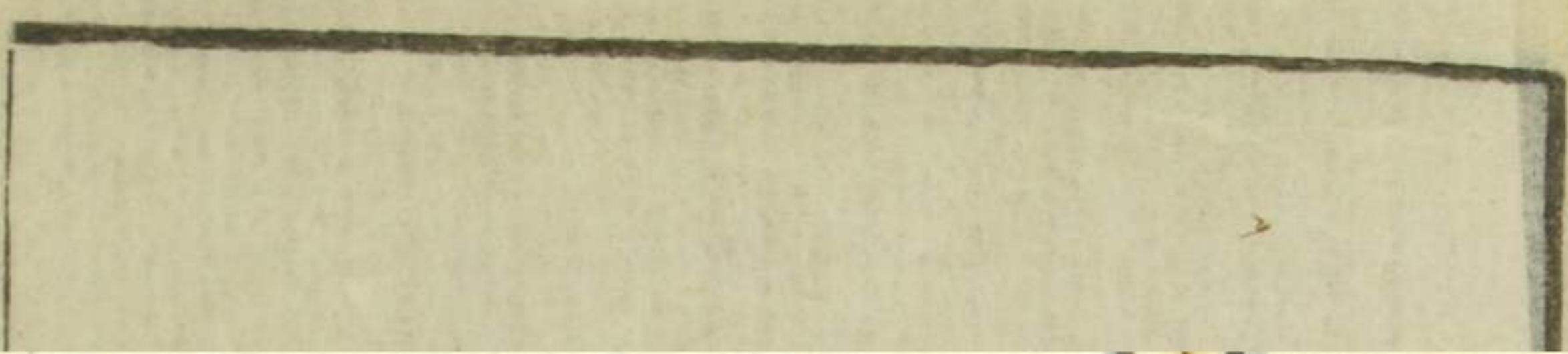
人をさしあげ井までどううこれと仰てゆりあり
て下さいま一トよれらさつこのうこ二まいふやそおびをそて
ままらかのゆきとゆのくおひきうけ孫「コウ北やアおのぬいと
まらまがころいの人ごぢこの姿おやアどころとツて
ゆうれいおね「一おんおのすおまけおあんどう
くられ入ふ跡ッておこ小れまをもやられてあめつ
こ孫「厄落し「ごさあさらめやうトおまきよらうてのぬ
まおおまやけと死なせおふおと「わく女がうよつらの皮をむ

西洋 東洋 日本

一



この
りやと木の
裸の松



は

に

一葉齋
女流筆

うやうやみ可野業

水き 孤子 人

からごの皮とそがれ
よ探をつるはした毅ひ
たうらうがわやあくな
うふゆてせいしやう
ふりたいてんそそとしてりうら
のせおうらららららららららら
まよふふふだぜほん二
られてある活板

おび

したる毅ひ
のちいあん
くと町中を書知る
のふてうちんとおんを可やく
あんとまれちがひて
ハオヤアね一子一
あうんあうんあうんあうん

一七

巾着の
 の大箱
 ぐいふ
 例の長
 こころ
 知てあ
 出まつ
 らいよ

見くら
 引つて一
 うトあ
 ぐさあ
 若どん
 手をつ
 だろく

旦那今お降りせとせしはまきりか「イヤ大後
 ちらり出出張でとせしまー」大「イヤサおめ
 と目めんくら遠くくそ月「あこ人を甲つこ
 うまうとえくしてさるぞり降ら給へとい
 ぐ圍ッこののさぜ何いさーおれ丁交り
 かりら今年我勤の博徒舎「押
 りごさ使ふ給くおめんがごふ一肩合ても
 ありね「ガマア悪イお控お知アね「うら

ぐに「知よ来てくれね「富貴様「でも
 杯やうあがら物さく「おしをさるとさよ
 ぐらん「おらアされたのでららん持どす「高
 こららんよにしおチツトぬうると且ね「と
 うをせくめし下膝しい餘りの権柄に追従
 ちん「富貴様「とまどぎ
 第二編の蘇次北八の二個巾着の大商人天後春

洋栗毛物下

下

度流の手代とあり英國の博覽會へ行く
 一回英佛の汽脚船に乗但まづ上海を港へ
 渡海の滑稽書蒸氣船中のおしとをどり
 続きて出板をせし喝采々々

西洋道中燦栗毛初編之下畢

發行

京都三條通柳馬場	堺屋仁兵衛
大坂心齋橋通南久宝寺町	伊丹屋善兵衛
備後町	近江屋平助
安上町	河内屋忠七
尾張名古屋本町三丁目	菱屋藤兵衛
二丁目	須原屋茂兵衛
東京日本橋通一丁目	山賊屋佐兵衛
二丁目	須原屋新兵衛
全	岡田屋嘉七
△ 芝神明前	和泉屋市兵衛
△	和泉屋金右衛門
△ 横山町三丁目	須原屋伊八
△ 浅草草町二丁目	枕屋喜兵衛
△ 水石町二丁目角	

書林

